

チャイナ・トレード・ペインティングの雪景色—どこにもない「中国」を探して—

堀川理沙（福岡アジア美術館）

「チャイナ・トレード・ペインティング」は、18世紀中頃から19世紀中頃にかけて、当時の清国で唯一対外貿易を許されていた広東港を中心に、中国人画工が西洋人向けに制作した輸出用絵画の総称で、近代黎明期特有の東西の美意識の混在したハイブリッドな魅力を持つ作品群である。福岡アジア美術館は、こうしたチャイナ・トレード・ペインティングを約24点所蔵するが、その中に《中国人家族のいる雪景色》（伝1810年頃<sup>i</sup>、75.2 x 110.3cm）がある。これは、積雪の山野を中国人家族が悠々と散策する風景を描いた油彩画で、元はイギリス個人所蔵とされるものである。管見の限りで、他に雪景色を描いたチャイナ・トレード・ペインティングは、イギリス、オランダ、香港など各地のコレクションに、20点を確認される。チャイナ・トレード・ペインティングには、中国風俗をエキゾチックに誇張した作品が多い中で、北方の荒涼とした雪景色を描いた作品はいささか異質に見える。

チャイナ・トレード・ペインティングは、従来「コレクターズアイテム」や「歴史的資料」として捉えられてきた。そのため、これまでの研究では、作品の造形的特徴に関する詳細な検討はもちろん、中国絵画史の文脈で論じられることもほとんどなかったと言って良い。特に雪景色作品については、他の画題と比べて比較的現存作品が少ないこともあり、作例の概括的な整理も進められていないのが現状である。

本発表は、《中国人家族のいる雪景色》を、従来のように「商品」あるいは「資料」としてではなく、「美術作品」として捉え直すことを目的とする。具体的な手順としては、まず、《中国人家族のいる雪景色》を中心に雪景色作品を概観して、その造形的特徴を整理する。次に、構図や遠近法などの点で、西洋絵画をどのように参照しているのかを具体的に明らかにする。さらに、空の表現、構図、陰影処理、そして留白法や敷粉法など、きわめて雪景山水的な表現が用いられていることを指摘して、中国絵画史上の位置づけを試みる。また、モチーフの「満州族」的特徴に注目し、そこに北方異民族を表す「蛮族図」の系譜と、西洋人にとっての他者イメージが重層する様相を考察することで、そこに映し出された清朝の統治者である満州族をめぐる政治性や、作品の生まれる文化的社会的背景にも言及する。

中国絵画の「近代」が、黎明の中に、おぼろげに姿をあらわし始めた時期、中国と西洋の出会いの地点に、現実には存在しない「中国」を描いた一群の作品が創られた。その過程を、《中国人家族のいる雪景色》という作例を通して具体的に明らかにするとともに、その社会的背景や政治性も考慮しながら、それらの作品の美術史上の意味について考えたい。

---

<sup>i</sup>発表者は18世紀後期の作品と考える。